

Theodore Dreiser : *Jennie Gerhardt* 研究

飯野晴子

セオドア・ドライサー (Theodore Dreiser, 1871-1945) の第二作目の作品『ジェニー・ゲアハート』 (*Jennie Gerhardt*, 1911) は、処女作『シスター・キャリー』 (*Sister Carrie*, 1900) と同じように、若い女性が、新しく拡大しつつある世界へとはいつていく、効果的でドラマチックな場面で始まっている。そして、主人公ジェニー・ゲアハート (*Jennie Gerhardt*) が、男性との関係やその事にまつわる幾多の苦難を通して、精神的に成長していく過程が描かれているとともに、人間というものは、自分ではどうすることもできない外部の力によって動かされていくものであるという、厳しい現実が描かれている。

I

空想にふける詩的な気質をもつ、寛大でこくのある少女ジェニーは、理性的であるというよりも、情緒的な人間であるという点で、『シスター・キャリー』の主人公キャリー (*Carrie*) に似ている。しかし、キャリーとは違って、人生や自然の中で見つける美は、ジェニーを、受けることより授けることの方へと動かしていく。すなわち、ジェニーにとっての美とは、自然自体の大きな発展なのであって、自然の美を努力して見つけ表現するような芸術家が、私利を保護するために必要とする美とは、性質が異なるのである。

ドライサーは、この性格描写を、ジェニーの「生まれつきの情愛」 (*innate affection*) や、「詩的な心」 (*poetic mind*) というような言葉を用いて第1章で前もって触れておき、さらに第2章で最も十分に描いている。それは、散文詩の形で描かれている。「ジェニーの心持——それを誰が言い表わすだろう」 (*The spirit of Jennie—who shall express*

it)¹⁾という言葉で彼は始めている。そして、それに続けて、彼女の精神が、本質的には自然そのものの精神であるということを明らかにするような、一連の短い小品文とスケッチによって、それが最も美しく清らかなものであるということを表わそうと努力している。

When the soft, low call of the wood-doves, those spirits of the summer, came out of the distance, she would incline her head and listen, the whole spiritual quality of it dropping like silver bubbles into her own great heart.

Where the sunlight was warm and the shadows flecked with its splendid radiance she delighted to wonder at the pattern of it, to walk where it was most golden, and follow with instinctive appreciation the holy corridors of the trees.²⁾

このような節にみられるドライサーの主題について、ドナルド・パイザー (Donald Pizer) は次のように述べている。

Dreiser's theme in such passages is less that of a religion of nature than of a natural religion; her spirit does not so much learn goodness from nature as find confirmed in natural beauty its own inherent goodness.³⁾

しかし、そのような精神は、自然の中においては気楽であるのに、人間の世界、すなわち「理想家空想家を白眼で見るような、自負と貪欲で織りなされている肉欲の世界」(world of flesh into which has been woven pride and greed [which] looks askance at the idealist, the dreamer)⁴⁾においては例外なのである。特に、人間の世界は、自然のままの美德の本能的な寛大さを理解することができない。なぜならば、人間の世界は、ただで与えるということよりも、金で売買することの方を好むからであ

る。「ジェニーは『自らを高く値踏みしようとはしなかった』ので社会から蔑視されている、とドライサーは後の方で述べている。」(Jennie is held in contempt by society, Dreiser tells us at a later point, because she “had not sought to hold herself dear”.)⁵⁾

この小説は、このように、道徳的な寓意物語のようにして始まっている。ジェニーの暖かくて寛容な精神は、自然な宗教を表わしている。しかし、彼女の精神の表現は、エルヴァンガー医師 (Dr. Ellswanger) やヴェント牧師 (Pastor Wendt) や老ゲアハート (old Gerhardt) らによって具現されるような、社会道徳や形式的宗教の、偏狭で禁制的な絶対視によって裁かれ、罰せられることになるのである。そして、性的墮落を描くよりも、道徳的寓意をうまく表現する方法として、ジェニーの無知と美德という現実が描かれている。それは、彼女が神の掟を破り、社会の決りを犯したがゆえに押しつけられる幻影に対して、釣り合いをとって描かれている。そして、ジェニーが産むブランダー上院議員 (Senator Brander) の私生児の誕生がその寓意を完成させる。なぜならば、その子供は、世間が罪だと信じているような境遇に生まれるが、実際は、情け深い「母胎の創造過程」(processes of the all-mother)⁶⁾ の産物だからである。ジェニーとドライサーにとって、誕生とは、人生における生殖の原理の美と優秀さの確証なのである。それゆえ、ジェニーは、その経験によって汚れないばかりでなく、精神が高揚され、強くされているのである。

また、ドライサーは、ジェニーに、キャリアに与えたのと同じ感動的な性格——初めて物質的な美しさや人生の壮麗さに遭遇したときに影響を受けやすい感受性の、驚きと興奮——を与えている。そして、最初の数章では、かなりの力をもって、2つの異なる世界——一方は、数部屋に8人もの家族がひしめき合い、病氣と貧困に悩まされているゲアハート家、かたや、厚いじゅうたんを敷きつめ、暖かさや光と色彩と音楽に満ちたコロンバスのホテルの、人を威圧するような優美さ——を描いている。ジェニーは、「お金持ちだったら、人生はさぞ華やかなものだろう」

(How beautiful life must be for the rich)⁷⁾ということも考える。このような彼女の考え方は、最も洞察力があるという点において、社会的無知を喚起するようなあらゆる純真さをもっている。それゆえ、ドルーエ (Drouet) やハーストゥッド (Hurstwood) に対するキャリーの反応のように、ブランダーに対するジェニーの反応は、審美的な感受性の現われ始めたものであるという考え方から切り離すことはできない。ジェニーにとって、ブランダーの部屋は、「不思議な」(wonder)場所であり、彼女はそれを、「天国のような」(heavenly)、「魔法のような」(magical)感じと結びつけているのである。——要するに、アラビアンナイトの中で、富と美の王国へ行った貧しい少年の幸運に対する喜びのような、精神的な大きな喜びと結びつけているのである。じゅうたんのぜいたくさ、部屋の明るさと暖かさ、家具調度品の好ましい趣味——ジェニーにとっては、これらすべてのものが、自然そのものの美をもっている。「美に対する彼女の反応は、キーツ (John Keats, 1795 - 1821) 的な深さと複雑さをもっている。なぜならば感覚的なものは、彼女の見つけるどんな環境の中にあっても、彼女の精神を感動させるからである。」(Her response to beauty has a Keatsian depth and complexity, for the sensuous moves her spirit in whatever context she finds it)⁸⁾。このことの例として、ドライサーは、習慣的な誘惑のし方のおきまりの形——社会的にまさっていて、それゆえに神のように威厳がある——を取りあげたが、それを、効果的で、まぎれもないドライサー的な主題へと変えている。

ドライサーはまた、ジェニーとブランダーに、決まりきった役割の中で、「人間的な」(human) 特性を与えることによって、その陳腐とも言える土台の上での誘惑を、高尚なものにしている。ジェニーは、第1章で、母親と一緒にホテルのロビーにいる時の容姿から、第11章で、亡くなったブランダーの私生児を産む時まで、「激しい苦しみの中の美」(beauty in distress)⁹⁾ であるが、ブランダーとジェニーの関係は、表面的で決まりきったものというよりも、それ自体が複雑で感動的である。

この小説を通し、一貫して繰り返されるモチーフを確立させながら、ドライサーは我々に、ジェニーがブランダーの部屋を、自分の魂のための“家”であると知っていたことを語っている。

The room is a place of gaiety and of human contact and exchange where Jennie's natural warmth has an outlet and where her qualities are appreciated.¹⁰⁾

このようにして、ブランダーとジェニーが、彼の部屋で何度も会う場面は、いくつかの、部分的に重なり合う情緒的背景の中で生ずるのである。「この二人の人物は、いわゆる、地方のオセロとデズデモナである。」(The two figures are a kind of provincial Othello and Desdemona)¹¹⁾。ブランダーは、経験豊かな厭世的な武人（彼の場合は政治の）であり、「艱難辛苦を通り抜けてきた」(received his hard knocks and endured his losses)¹²⁾ので、それゆえ、「苦労人の眼に同感を呼ぶような」(which touched and awakened the sympathies of the imaginative)¹³⁾独特の雰囲気をもっている。そしてジェニーは、若々しい無知な少女であり、彼女にとって、ブランダーとの交際は、世間一般との最初の接触を表わしている。二人の接近、彼女の賞賛と思いやり、彼女の自然な好意と新鮮さに対する彼の反応が、愛の成長を促していく。しかし、ブランダーとジェニーはまた、父と娘のような関係でもある。それゆえ、二人の愛情は、保護される者が、保護してくれる者に対して抱く愛情であるばかりでなく、娘のもつ、人を刺激するような無知と、父親のもつ、潜在的な罪の意識が、もっと複雑にからまったような感情を含んでいるのである。ブランダーがジェニーに、彼女やゲアハート家のための、いくつかの寛容な計画を告げると、「衝動にかられて、彼女は両腕を彼に巻きつけた。そして、『ほんとうに、よく言って下さいますのね。』と、彼女は娘らしい可愛い調子で言ったのである。」(reaching up impulsively, she put her arms around him. “You're so good to me,” she

said with the loving tone of a daughter).¹⁴⁾

感傷的でありふれた筋で、彼らの関係が明白に組み立てられているにもかかわらず、また、老ゲアハートが、ほとんど即座に、ジェニーは死よりも悪い運命を被った、と信じたにもかかわらず、以上のように、ジェニーは、単なる誘惑された給仕女ではないし、ブランダーも決して、悪賢い上流階級の悪漢ではないのである。ブランダーは、ジェニーに対して、激しい切望と欲求をもっていたが、それは、ほとんど同じくらい力強い、彼女に対する親としての責任のようなものと結びついていた。そして、二人のたった一度の性的行為の原因は、次のように考えられる。

... his [Brander's] one act of sex with her [Jennie] occurs not as a planned seduction in which he seeks payment for his efforts as a family benefactor (though their lovemaking has this appearance), but rather has its principal source in Jennie's impulsive response to the deepest strain in her nature, her thankfulness at his generosity. ¹⁵⁾

ドライサーは、このような二人の関係を、次のような言葉でしめくくっている。

The English Jefferies has told us that it requires a hundred and fifty years to make a perfect maiden. "From all enchanted things of earth and air, this preciousness has been drawn. From the south wind that breathed a century and a half over the green wheat; from the perfume of the growing grasses waving over heavy-laden clover and laughing veronica, hiding the green finches, baffling the bee; from rose-lined hedge, woodbine and cornflower, azure blue, where yellowing wheat stalks crowd up under the shadow of green firs. All the devious brooklets' sweetness where the iris stays the

sunlight ; all the wild woods hold of beauty ; all the broad hills of thyme and freedom—thrice a hundred years repeated.

“A hundred years of cowslips, bluebells, violets ; purple spring and golden autumn ; sunshine, shower, and dewy mornings ; the night immortal ; all the rhythm of time unrolling. A chronicle unwritten and past all power of writing ; who shall preserve a record of the petals that fell from the roses a century ago ? The swallows to the house-tops three hundred times—think of that ! Thence she sprang, and the world yearns toward her beauty as to flowers that are past. The loveliness of seventeen is centuries old. That is why passion is almost sad.”¹⁶⁾

これは、ブランダーとジェニーが、彼の部屋で愛し合う章を結んでいる、19世紀のイギリスの自然神秘論者、リチャード・ジェフリーズ (Richard Jefferies, 1848—1887) の言葉であるが、いくつかの意図をもって引用されている。そのうちで最も明らかなことは、これが言い換えの形——すなわち、ブランダーがジェニーにキスをしているような二人の愛の過渡期から、次の章の冒頭部分で、我々が、ジェニーが「墮落した」(fallen) ことを知る部分への移りかわりを、別の言葉で言い表わしている——になっている。そして、この長すぎるような引用文は、ジェニーとブランダーの関係の本質的な性格を要約しているとも言える。なぜならば、この引用文が、多くの世代を通じて、女性の美を、自然に徐々に発展させる、長いゆっくりとした作用という主題を扱っているからであり、また、ドライサーがこの章を、「もしもすべての美が消え去るものであって、玉の緒の絶えぬ間にこれらのものをかき抱くことを許されたとして、その時、人はそれを見過ごしにするであろうか。」(if all beauty were passing, and you were given these things to hold in your arms before the world slipped away, would you give them up?)¹⁷⁾ という彼自身の質問でしめくくっているからである。そしてさらに、自然の美に対するジェフリー

ズの頓呼法の、ありふれてはいるが豊かな散文の下には、ジェニーとブランダーを結びつけた性的衝動の、劇的な真理があるからでもある。「ランドルフ・ボーンが何年も前に記したように、アメリカの小説に対するドライサーの大きな貢献の1つは、まず『彼が性的人間を作り上げた』ことである」(As Randolph Bourne noted many years ago, one of Dreiser's major contributions to American fiction was that for the first time "he made sex human.")¹⁸⁾

II

レスター・ケイン (Lester Kane) がジェニーを誘惑する場面は、ブランダー上院議員の場合と同じような特徴を多く含んでいる。ゲアハート家は、新たな生活を始めるために、コロンバスからクリーヴランドへと移って行き、そこでジェニーは、洗練された上流階級のブレースブリッジ家 (the Bracebridges) に仕事を見つける。コロンバスのホテルの場合と同じように、目新しい上流の世界に触れることによって、ジェニーの趣味と認識は再び改善されていく。しかし、再び知識の面で向上していくということは、性の危険をもたはらんでくる。レスター・ケインは、愛する人を精力的に求めていく人物である。そして、老ゲアハートが偶然にも手にやけどを負うという、ゲアハート家の新たな危機のおかげで、望み通りジェニーを手に入れることができる。なぜならば、ジェニーは再び、自分を欲する男に援助を乞わなければならないという、犠牲的役割を負う立場に置かれたのであり、援助を得たことによって、その男を恋人として受け入れなければならないからである。

このように、ブランダーとレスターの誘惑は、ゲアハート家の危機に際してジェニーが犠牲的精神を発揮したことに基づくものであるという点で似ているが、この類似点は、単に表面的なものである。なぜならば、ケインは、良心のとがめを感じている父親的な恩人ではなく、36歳の積極的で男性的な男である。また、今やジェニーは、自分に対するレスターの性的興味をすぐに悟るだけの経験をもっている。二人は、お互いに

対する反応の性的根拠を隠したり、抑圧したりはしない。その性的根拠とは、ブレースブリッジ家で働いているジェニーをケインが見た瞬間から二人ともが感じ始めている、意識的で興奮させるような力なのである。さらに、ジェニーとブランダーの関係においては、経験を積んだ者と無知な者、父親と娘、恩人と恩恵を受ける者、という事実の方が、個人的特質よりも重要な意味を持っていたのに反して、ジェニーとレスターのお互いに対する関心は、二人の立場にはあまり関係がないようである。

Rather, the love of Jennie and Lester is to Dreiser the consequence of their essential beings. Kane is a vigorously possessive male. His "You belong to me" to Jennie echoes exactly Brander's statement, but Kane means exclusive proprietorship rather than the protection which Brander intends.¹⁹⁾

所有したいというケインの力強い精力は、所有されたいというジェニーの本能的な欲求とよく調和している。ドライサーは、レスターがジェニーに対して感じている避けがたい魅力を、次のように描写している。

It is a curious characteristic of the nondefensive disposition that it is like a honey-jar to flies. Nothing is brought to it and much is taken away. Around a soft, yielding, unselfish disposition men swarm naturally. They sense this generosity, this non-protective attitude from afar. A girl like Jennie is like a comfortable fire to the average masculine mind; they gravitate to it, seek its sympathy, yearn to possess it.²⁰⁾

人間というものは、相手の本質を見抜くものである。「彼女は、男の——1人の男のために生まれてきた種類の女だ。異性に対する彼女の態度は、愛、優しさ、奉仕、と結ばれている。」(She was the kind of a woman

who was made for a man—one man. All her attitude toward sex was bound up with love, tenderness, service.²¹⁾ とレスターは考える。また、初めてレスターがジェニーに接吻するとき、「猫につかまれた小鳥のように、彼女は恐れて気が遠くなった。が、接吻を通して、何ともいえぬ、恐ろしく生々した、力強いものが彼女に伝わって来た。」(She was horrified, stunned, like a bird in the grasp of a cat ; but through it all something tremendously vital and insistent was speaking to her.)²²⁾ のである。

ドライサーは、ジェニーとレスターの愛の中に、一種の性的・気質的適合性を描き表わそうとしている。

Jennie and Lester are drawn to each other not only by a “magnetic” desire which might blaze and then die but by permanent needs—the need of the strong man whose strength derives in part from the act of possession, and the need of the “soft, yielding” woman whose deepest emotional life lies in the act of being possessed, in the giving of herself not only sexually but in every other way.²³⁾

このようにして、ジェニーとレスターは、迅速に、結婚を抜きにして結びつけられていくのである。二人の関係は、表面上は、援助を必要としている女性と、その弱みにつけ込んでいる経験豊かな恩人という形をとっている。しかし、根本的には、相互に共鳴しやすい、「自然な親近感」(natural affinity) に基づく関係なのである。それゆえ、ジェニーがレスターに自分を捧げることに同意したとき、彼の申し出を本当は受け入れてはならない自分の境遇のために「悲しんでいた」(sorrowful) ものの、彼女の「やってみますわ」(yes) という返事は、「不思議な身ぶるいするような愛情を感じながら」(with a strange thrill of affection)²⁴⁾ 口にされたのである。

また、ジェニーの成長の母体は、自然の世界から人間の世界へと移っ

ていく。ブレイスブリッジ夫人との生活や旅行を通して、ジェニーはすぐに、洋服、ふるまい、そして社会的慣習に精通し、自信を得ていく。また、さらに意義深いことに、彼女はレスター自身を通して、社会構造や人生構造に対する知識を得ていくのである。二人が出会ってから数十年後、レスターと共に外国に旅行するときまでには、ジェニーは彼にとって適切で賞賛される伴侶となっているばかりでなく、二人が訪れるヨーロッパやアフリカの古代文明における悲劇的な意味までも、理解することができるようになっていく。つまり、彼女は今やレスターが心に抱いていることを分かち合えるほどに成長しているのである。

She now shares Lester's breadth of vision. Although she clings to the ideal of marriage, she has otherwise adopted his moral relativism, particularly in matters of sex and religion.²⁵⁾

ジェニーの人生における根本的な欲求は、自分を捧げることであり、この欲求は、レスターを通して満たされていくのであるから、彼女は、『ジェニー・ゲアハート』の後半の部分では、一見活気がなくなったようにも思える。しかし、実際には、彼女は成長も行動もしているのである。そして彼女の知的成長と独創力は、洗濯女の娘が知的にも社会的にも成長してレスターにふさわしい伴侶になりながら、永遠に結ばれる可能性が、徐々に減っていくという悲劇的風刺に貢献しているのである。

III

ジェニーとレスターは、一緒に暮らすようになると、すぐにお互いについてさらによく知るようになるとともに、自分たちの関係が負わされている困難な状況をも知るようになる。

... Dreiser has moved the novel from the theme of Jennie as a betrayed child of nature to that of two human beings involved in

the complex interaction between their love and the social reality which is the context of that love.²⁶⁾

レスターは、ある程度の自負心をもって、自分が型にはまった様式や慣習からは自由であると信じている「新しい型の人間」(the New Man)である。しかし、そう信じているにもかかわらず、彼は、型にはまった人間たちが自分を肉体的にも精神的にも支配しているのだということも悟るのである。また、ドライサーはレスターを次のように特徴づけている。

Dreiser characterizes Lester as a man whose strength and independence seem adequate to wrench his life with Jennie out of the pattern to which its irregular origin and their different social classes have apparently destined it but whose basic inclinations are nevertheless toward an accommodation with his world rather than a struggle against it.²⁷⁾

それゆえ、レスターは、大きな危機に直面する前の、ジェニーと結婚できる状態のときにもそうすることができず、その結果が、ジェニーと別れなければならないという取り返しのつかない事態となるのである。つまり、レスターは、『シスター・キャリー』におけるハーストウッドのように、人生における禁じられた喜びを求めて手を伸ばし、いったんは住みなれた安全で気持ちの良い世界から離れるのであるが、自分には、中年になってから性質の異なる世界で、新しい生活を始めるだけの力が欠けていると思い、後戻りしてしまうのである（ハーストウッドの場合は後戻りできなかったが）。

このように、人間というものは社会的環境によって制限されていて、その制限を破るときに危険を招くものであるという点について、ドライサーは、「社会的ダーウィニズム」(Social Darwinism)の理論を用いて、

第 34 章の冒頭の部分で述べている。動物は、生きることのできる制限された領域をもっていて、人間も同じである。しかし、人間の境界線は、自然界のものというよりはむしろ社会的なものであるというのである。

... the opinions, pleas, and judgments of society serve as boundaries which are none the less real for being intangible.²⁸⁾

人間はそのような境界線を越えるとき、必ずしも悪い方に運命づけられるとは限らないが、「気持ちよく」(comfortably)生活することはできないのである。

こうした環境に左右される人間の姿を端的に表わしているのが、ヴェスタの死後、ジェニーを慰めに来たときのレスターの言葉である。ヴェスタの死を悲しみ、またジェニーを置き去りにしたことを悔いながら、レスターは次のように語る。

It isn't myself that's important in this transaction apparently ; the individual doesn't count much in the situation. I don't know whether you see what I'm driving at, but all of us are more or less pawns. We're moved about like chessmen by circumstances over which we have no control.²⁹⁾

この言葉は、まさにレスターの得た真理を表わしていると言える。

そして、生きている間ずっと、自分を取り巻く環境や因襲に制限されてきたレスターは、その死後でさえも、因襲に縛られ支配されることになる。彼の死体は、シンシナチに運ばれるまでの間、シカゴにある妹の家安置される。

It was curious to see him lying in the parlor of this alien residence, candles at his head and feet, burning sepulchrally, a silver cross

upon his breast, caressed by his waxen fingers. He would have smiled if he could have seen himself, but the Kane family was too conventional, too set in its convictions, to find anything strange in this.³⁰⁾

もしも彼が自分自身のこの姿を見たならば、自分の不信仰と、自分の死体の宗教的飾りつけのあいだの不調和をおもしろがったことだろう。しかし、彼がいぶかり当惑したとしても、死後も生前と同じように彼を支配している家族の因襲的な信念の力と厳格さを改めさせることはできなかったに違いない。

このように、レスターは自分を取り巻く環境や因襲にあくまでも支配され、そこから完全に抜け出すことはできなかった。そのようなレスターとは違い、ジェニーは自らすすんで因襲を無視する。そして、ジェニーが因襲を無視するということは、種々の皮肉を含んでいるのである。まず、自らすすんで因襲を無視したにもかかわらず、ジェニーは決して自分の家族をなごりにしたりはしない。

She wants most, in fact, to be a wife and a mother, and the years she spends living out of wedlock with Lester Kane are ironically the most conventional years of her life, for here she finds the home and family that she most desires.³¹⁾

このことは、偽りの家族概念、さらには偽りの道德概念に対するドライサーの皮肉を表わしていると言えるのである。

... Dreiser directs his irony outward against a false concept of family morality and therefore, by extension, against false concepts of morality within any social institution. Because there is happiness and emotional fulfillment in the Hyde Park home, the "family"

living there is “moral” whatever its official status in social morality.³²⁾

彼女はただ、法の精神よりも法の字句の方に忠実な社会によって非難されているにすぎないのである。そして、「ドライサーは、西洋の人間が、自分の本質と本当に折り合っていることは決してなく、従って、その本質を規制する道徳法とも決して折り合うことはないということを暗示している。」(Dreiser suggests that Western man has never really come to terms with his nature—and thus has never come to terms with the moral laws which regulate that nature.)³³⁾ さらに、レスターとジェニーがヨーロッパへ旅行するとき、ドライサーは、この物語をずっと大きな背景の中に置く機会を得る。すなわち、「衰頹したギリシャ、破滅したローマ・忘却せられたエジプト」(decayed Greece, of fallen Rome, or forgotten Egypt)³⁴⁾ という背景の中にこの物語を置くのである。そして、そのことによって、おのおのの文化は、より大きな機械的な連続体や、人間の心では決して完全には理解することのできない様々な法則の、変わりやすい一部分にすぎないのだということを表わそうとしているのである。「レスターは、小さな因襲が、この世界、大きな歴史の世界でいかに拡大されて見えることかを好んで指摘した。おぼろげながら、それがジェニーにもわかってきた。」(Lester liked to point out how small conventions bulked in this, the larger world, and vaguely she began to see).³⁵⁾ つまり、たとえジェニーが「罪を犯している」(sinned) としても、それは、当座の文化によって制限された見地からだけの罪にすぎないのである。

Admitting that she had been bad—locally it was important, perhaps, but in the sum of civilization, in the sum of big forces, what did it all amount to ? They would be dead after a little while, she and Lester and all these people. Did anything matter except

goodness—goodness of heart? What else was there that was real?³⁶⁾

また、ドライサーは、因襲の最たるものとも言える現代宗教が、過去の遺跡の単なる一部分であり、現代キリスト教会の教えと 20 世紀の生活との間には、関係がほとんどなく、全くないときえ言えるほどであるということを示すことによって、この作品を引き締めている。庶出ということでジェニーの名を汚したヴェスタの洗礼式は、無慈悲な皮肉で満ちている。特に、牧師の祈禱の言葉「両親と友人に榮譽と慰安を与えさせ給え」(that she may prove an honor and comfort to her parents and friends)³⁷⁾は、無慈悲な皮肉そのものである。そして、そのヴェスタこそが、皮肉にも、老ゲアハートやレスターやジェニーのつらい時における慰めとなるのである。

Vesta is a latter-day Pearl; her function throughout the novel is to demonstrate the irony of sin, since she attracts not only the love of Jennie but also of old Gerhardt and Lester.³⁸⁾

つまり、「ヴェスタの幸福な気立ては、生まれつきの無知を非難する暗い宗教的世界と対照をなして位置づけられているのである。」(Vesta's happy spirit stands in contrast to the sombre religious world that condemns natural innocence)³⁹⁾。さらに、宗教の力がジェニーの苦悩を増大させたのだと言うこともできる。なぜならば、ブランダー上院議員がジェニーに結婚を申し込んだときに、もしも老ゲアハートが、宗教的な良心のとがめから反対することがなければ、ブランダーが死ぬ前に、二人は結婚できたはずだからである。

Pious in the face of opportunity, Gerhardt's religion makes him his own worst enemy, a quality of character that Dreiser saw in his

own father. While all of Dreiser's characters are blind, lacking self-understanding and unable to anticipate the future, the religious characters are the blindest and the source of the most obvious irony.⁴⁰⁾

ジェニーが妊娠していることを知ったとき、老ゲアハートは彼女を自分の家から追い払う。しかし、世間は、「罪を犯している」(sinning) ジェニーを、信心深いゲアハートよりもずっとよく扱ってくれるのである。そして、老ゲアハートが家庭を必要としたとき、それを与えてくれるのは、すべての子供たちのうちで、彼が自分の家から追い出したジェニーだけなのである。

以上のように、ドライサーは、因襲の最たるものである現代宗教と、人々の生活との間にはほとんど関係がないということを主張している。そして、老ゲアハートに、罪人として扱われるジェニーこそが、本物の愛をもち、かつ誠実であるということや、因襲を破って生きるジェニーこそが本当の人間愛をもっているということは、人間社会に対する大きな皮肉であると同時に、この作品の主要な主題の一部を構成しているのである。

IV

『ジェニー・ゲアハート』の中では、偶然というものが、非常に重要な役割を果たしている。なぜならば、偶然が、この作品に機械論的な一貫性をもたせているとともに、登場人物の中で何が本質的で永続的なものなのかを示すための触媒として、順番に彼らの運命の原因となっていくからである。ドライサーの描く登場人物たちは、自己の中にその運命を伴っている。それゆえ、たとえある特定のでき事とその人物の最後を決定しなくても、もう1つの同じようなでき事が、その人物の運命に影響を与えることになるのである。それは時間の問題と言うこともできるかもしれない。たとえば、レスターは、良い生活を好む性格を与えられ

ているから、二人の関係が彼のぜいたくで心地よい生活を脅かすようになったとき、ジェニーを見捨てて去ることになるのである。ハーストゥッドのように、レスターもまた、自分の気質の犠牲者なのである。彼は、この小説の中を流されていく。ジェニーとの関係へと流されていき、その関係からも流され出ていく。そして死に向かって流されすらすらするのである。彼は、「取るに足りない疾病も危険を表わすといった身体的状態へと流されている。その結果は必然的なものであり、そのときがやって来た。」(drift(s) into a physical state in which a slight malady might prove dangerous. The result was inevitable, and it came.)。⁴¹⁾ 老ゲアハートもまた、自己の気質の犠牲者なのである。彼は内面的な弱さを与えられているので、彼がひどく神経質になるのは、時間の問題なのである。そしてまた、ジェニーも同じように、自己の気質の犠牲者である。彼女は寛大さを与えられているので、最初は自分の家族のために、次にレスターのために自分自身を犠牲にすることは、避けられないことなのである。

このように、偶然というものが、ジェニーとレスターを結びつけるのかもしれないし、また、様々な行動の言い訳となるような境遇を作り出すのかもしれない。しかし、ひとたび、おのおのの登場人物の残りの性質が与えられると、その後で起こることは、必然的なものなのである。

Dreiser's characters realize an essential self, and the end for them is in their beginning. The outcome is inherent in the character and in the situation. Given their temperament and the circumstances that befall them, they are destined to act as they do, to remain true to their primary nature, to the chemic pull of temperament, and to the laws of probability that govern such temperaments in their given society. And this is true whether they succeed or fail. Dreiser negated the will of his characters and made them dupes of their temperament, of circumstance, and of time.⁴²⁾

もちろん、自己と社会との間の争いが、ジェニーとレスターの窮地や、二人の自由意志喪失の源となるわけであるが、また、外部の巨大な力が個人の意志を無意味なものとするのである。たとえば、レスターは、ジェニーを欲し、かつ父親の金も欲するという、両方一緒には得ることのできない願望の間に自分が捕えられていることに気づいたとき、また、結婚しない状態でジェニーと共にずっと生活していくことを欲し、かつ社会的にしっかりした地位についていることを欲するという、両方一緒には実現不可能な願望の間に自分が捕えられていることに気づいたとき、実際には、どちらを選ぶかという選択権は全くもっていなかったのである。なぜならば、彼にとっては、この2つの対象は同じ重さではなく、一方がより魅力的であると同時に、それ自体がもう一つの対象に影響を及ぼしてもいるからである。

ジェニーは、ブランダーのお金をもらうことに関して、またレスター・ケインと一緒に暮らすことに関してためらうものの、自分の家族を助けたいという願望と、そのための金の必要性を偶然与えられてしまうために、実際には自分の行動に対する選択権など持っていないのである。そして、レスターも、ジェニーに引きつけられてはいるものの、並の収入で生活することに満足できない性格を与えられているために、実際は選択権など持っていないのであり、偶然の力で自分が相続権を奪われる事態に追い込まれると、それを免れるために、ジェニーを残して去るのである。

Dreiser's theory of "weighted alternatives"—that is, his belief in determined action—is central to every one of his novels.⁴³⁾

この作品の登場人物たちの欲求の対象は、外部の力によって、あらかじめどちらを選ぶか定められているということで、個人の意志を無効にしているのである。つまり、彼らのとる道は、彼ら自身が選ぶようとしてい

る対象自体によって、外部から決定されるのであって、どちらを選ぶか自由に決めようとする選び手の内面から決定されるわけではないのである。

このように、ドライサーの描く登場人物たちは、実際には二者択一でも何でもない「選択」(choices)の犠牲者である。つまり、実際には単なる思い込みにしかすぎない「選択」の犠牲者なのである。

Since each situation will present one alternative more compelling than another, his characters become victims of that situation, victims of their condition, which was the way that Dreiser looked at man in general.⁴⁴⁾

都市というものは、特に人生の流れをうまく表わすものであるが、ドライサーの描くほとんどの人物と同じように、ジェニーとレスターもまた、「おびただしい荷馬車や乗物の群、夢に見る幻影(のような先を急ぐ)歩行者の往きかい」(the great mass of trucks and vehicles, the counterstreams of hurrying pedestrians [which pass like] shadows . . . in a dream)⁴⁵⁾の一部なのである。この小説の中で25年が過ぎる。そしてジェニーは美しい18歳の娘から、43歳の品のある婦人へと成長していく。ドライサーは言う、「若気の至りの軽はずみの時が終わったあとで、万事空なりという果敢なきが心に忍び込む。『伝道の書』の中に最もよく表現された無常観だ」(After the first heedless flights of youth have passed, there is a deadening thought of uselessness which creeps into men's minds—the thought which has been best expressed by the Preacher in Ecclesiastes).⁴⁶⁾このようにして押しよせる時の流れは、自らが統制したり理解したりすることのできない時間というもののみまぐるしい流れの中に捕えられた人間の、最終的な無意味さとはかなさを表わしているのである。ドライサーは、時間という主題を強調し、この小説を、我々すべてに対してもあてはまるようなことば、ジェニー

は「毎日毎日、あてのない繰り返しの中で過ごしていくであろう。そして——？」(days and days in endless reiteration, and then—?)⁴⁷⁾で終えている。我々は、『ジェニー・ゲアハート』という小説の中で、この疑問符によってもっともよく描写されているような「渦の中で、くるくる回りながらその中心に流されていく木の切れ端のように、次々に起こる大きな渦の中に巻きこまれている人間」(man in one larger vortex after another, spinning like chips of wood in a whirlpool toward a center)⁴⁸⁾の姿を見ていくうちに、個人的レベルから、社会的レベル、ひいては形而上学のレベルまで高められていくのである。

ジェニーは単なる個人ではない。国民的ひろがりをもった1つの典型であり、泥にまみれながらも常に高きを望み、運命に虐げられる悲劇的な大衆の原型である。そして、彼女が置かれる環境がまた全国的普遍性を見事に捕えて描かれている。金の獲得に熱狂し狂おしい野望が渦巻いたあの勃興期のシカゴはアメリカ全土の縮図と言えるだろうが、それをこの作品ほど鮮明に描いて見せた小説はない。

Notes

- 1) Theodore Dreiser, *Jennie Gerhardt* (Cleveland and New York: The World Publishing Company, 1911), p.15
- 2) *Ibid.*, pp.16 - 17
- 3) Donald Pizer, *The Novels of Theodore Dreiser: A Critical Study* (Minneapolis: University of Minnesota, 1976), p.106
- 4) Dreiser, p.15
- 5) Pizer, p.106
- 6) Dreiser, p.98
- 7) *Ibid.*, p.29
- 8) Pizer, p.108
- 9) *Ibid.*, p.108
- 10) *Ibid.*, p.108
- 11) *Ibid.*, p.108
- 12) Dreiser, p.20

- 13) *Ibid.*, p.20
- 14) *Ibid.*, p.53
- 15) Pizer, p.109
- 16) Dreiser, p.77
- 17) *Ibid.*, p.77
- 18) Pizer, p.109
- 19) *Ibid.*, p.110
- 20) Dreiser, p.126
- 21) *Ibid.*, p.144
- 22) Dreiser, p.130
- 23) Pizer, p.111
- 24) Dreiser, p.166
- 25) Pizer, p.113
- 26) *Ibid.*, p.111
- 27) *Ibid.*, p.113
- 28) Dreiser, p.238
- 29) *Ibid.*, p.401
- 30) *Ibid.*, p.425
- 31) Richard Lehan, *Theodore Dreiser : His World and His Novels* (Carbondale : Southern Illinois University Press, 1969), p.87
- 32) Pizer, p.128
- 33) Lehan, p.90
- 34) Dreiser, p.305
- 35) *Ibid.*, p.306
- 36) *Ibid.*, p.306
- 37) *Ibid.*, p.122
- 38) Pizer, p.130
- 39) Lehan, p.81
- 40) *Ibid.*, p.90
- 41) Dreiser, p.417
- 42) Lehan, p.94
- 43) *Ibid.*, p.92
- 44) *Ibid.*, p.91
- 45) Dreiser, p.400
- 46) *Ibid.*, p.192

47) *Ibid.*, p.431

48) Lehan, p.96